

東西洋の子守唄

文學博士 松村武雄

伊太利のエヴェリン・マルチネンゴ・セザレスコ伯爵夫人が、その著「民謡の研究」(Essays in the Study of Folk-Songs)のうちに云つたやうに、幼年期は、一種の大きな神秘である。われわれはすべて人間生活の一時期として、幼年期を經過してゐる。しかも大人になつた今日から、この時期を回想して、はつきりその時代を心の中に實現させることは、なかく困難である。或は觀察により、或は直覺により、或はまた經驗によつて、この無邪氣な神聖期を幾分かは眼前に彷彿させることが出来るかも知れないが、概して云へば、幼時に關する思出なるものは、朝の夢のやうな混亂し稀薄化した記憶である。朝の夢が、一方の端は、眠の無意識界に連なり、他方の端は、覺醒時の現實と相混融してゐるやうに、幼時の回想も、いろんな他の分子によつて不純にせられ、稀薄にせられ、朦朧化せられてゐることを拒むことは出来ぬ。

しかし、幼年期の特徴として、われわれが可なり確かに知つてゐることは、幼児が、少年少女期や、青年期や、大人期なきの人間に比して、遙かに非物質的であり、遙かに少ない合理性の持主であるといふことである。そしてこのことは、やがて彼等の世界が、童謡を心から受け入れる世界であることを示すものでなくてはならぬ。なぜなら童謡の世界は、純情と想像との世界であり、ものみなに生命を認める世界であり、マテリアルな考方を排斥する世界であるからである。

それから幼児はまた韻律リズムに對して、大きな愛好を示すものである。セザレスコ伯爵は、

「幼児は、節奏ある騒音を喜びます。その騒音が、言葉の形をさるにしろ、音楽の形をとるにしろ、若くは多くの鍵↑

のちか合ふ音にしろ。」

と云つてゐる。未開人が詩を通しての自己發表の階段に達する前に、單なる律動によつての自己發表の手段を發見したやうに、兒童も、幼い時代には、詩を持つ前に、先づ律動を持つてゐる。幼兒の律動感は、その生活に著しく現れてゐる。彼等はスプーンで食卓を叩いたり、手に持つ棒ぎれで椽板をうつたりして、そこに生ずる律動を享樂してゐる。メードライン・アルストン氏はその兒童詩論に於て、

「印度の兒童は、心が満足してゐるときには、走り廻ることをしないで、不規則な方法で噪音を立てる。そして彼は一種の騷擾に居るかのやうに、獨坐してそれを樂しんでゐる。ボン／＼賣が彼に小さなトム／＼を貸す、彼はあぐらをかいて、トム／＼を膝の上に置いて、頻りに打ちつゞけた。……象の秣の中でたつた一人で、調子も言葉もなく、たゞもう打つこみが、彼の機嫌をよくした。」

とも云つてゐる。そしてこの事實がまた、幼兒の世界をして童謠の世界たらしめる一因である。何故なら、童謠は、幼ない、素樸な韻律を持つこゝを特徴としてゐる一種の詩であるからである。

そして、さまざまの形式の童謠のうちでも、子守唄が最も早く幼兒に味はれる。子守唄は他の童謠が持たないところの或るものを持つてゐる。それは母若くは子守女である。幼ない子供は一人で童謠の世界に足を踏み込むには、あまりに幼稚に過ぎてゐる。子守唄はよくその缺陷を補うてゐる。子守唄は、母の、若くは子守女の唇を通して、乳房と一しよに、若くは眠をさそう節奏的な身體の動搖を一しよに、幼ない兒に與へられる。そこに他の童謠が持ち得ない、涙ぐましい、なつかしい、甘い夢のやうな味が湧く。

幼兒の心は、未開人の心と相通うてゐる。フイヤーカント氏は、その著「自然民族と文化民族」(Naturvölker und Kultur)に於て、未開人の意識活動を不隨意的意識活動であるとして、文化人の隨意的意識活動から區別した。「幼兒の心の

動きも、不隨意的意識活動である。彼等の心的活動は、個性的要素が少なく、類型的要素が多い。大人のやうに、個々に分化し複雑化した経験や、意考の作用を蒙る程度が、比較的に少ないのである。だから彼等の心の糧であるところの子守唄も亦、東西洋を通じて太だ著しい類似を示してゐる。

子供の眠は、一個の *infantile virtue* である。幼ない子供が、すやくゝ眠るといふことは、その親の安心であり、慰藉であり、歡喜であるといふ意味に於て、子供の眠はやがて子供の善行でなくてはならぬ。

かくて子守唄に於ては、「よく眠る」^{いふ}ことの報賞として、子供の心を喜ばすさまゝく、ものが約束される。これが東西洋の子守唄を貫く一通則である。日本の子守唄を見よ、

ねんねこよ、ねんねこよ、

ねんねのもりは、何處へ行た。

あの山越えて、里へ行た。

里の土産に何もろた。

でんでん太鼓に笙の笛、

起上り小法師に犬張子……………

さあるではないか。これと同じやうに、英吉利の子守唄では、船一ぱいの玩具が約束せられ、伊太利の子守唄では、兎の皮が眠の褒美となり、佛蘭西のフランダーズ地方では、蜜と香料とライ麥の粉でこしらへた菓子、綺麗な着物等が、眠れるものへの約束品となつてゐる。

Un jour un' pauv' dentillière

En amignon ch' un petit garchun

Qui d'puis le matin n'faisons que blaire,

Volait l'endormir par une canchun.

といふ、方言に満ちた子守唄はそれである。それから希臘の子守唄は、その一つは眠に對する報賞の品の美はしさで、他の一つは賞品の大きさで、この種の童謡中の一大異彩でなくてはならぬ。曰く、

ねんねこよ、ねんねこよ、

お前のおかさんが歸つたら、

河のほごりの月桂樹、

岸のほごりの百の花、

薔薇こ石竹を上げませう。

は、その一つであり、

ねんね子よ、ねんね子よ、

砂糖のかはりにアレキサンドリア、

おままのかはりにカイロ府、

それからお前が三年も、

王さま 殿さまなるやうに、

コンスタンチノープルを上げませう。

は、他の一つである。

報賞から責罰へは、ほんの一步である。幼ない兒のよき眼が、養育者の安心歡喜として、さまざまの報賞を豫約せられ

るやうに、いつまでも泣き、且つすねて眠らない子供は、養育者の苦惱を以て、責罰を提示せられざるを得ないのである。眠らざるものへの責罰の豫告には、さまざまの種類の種類があり、さまざまの度合がある。この點に於ても、眠るものへの報賞と好箇の對比をなしてゐる。獨逸の子守唄に云ふ、

ねんねよ、赤ん坊、ねんねしな、

小ちやい羊が二匹づれ、

あれく向ふからやつて来る。

一つは黒くて、他は赤い。

もしも坊やが眠らぬと、

始めは黒が、つぎに白が、

坊やの小指を噛みますよ。

の如きは、子供への脅威に使はれるものが、いかにも優雅で、子供はこれに對して脅威を感じるよりも、寧ろ好奇心を感じて、それが爲めに猶更眼を大きくして、覺めつゞけるだらうとも思はれる。われわれは、そこに兩親の慈愛——假面的な脅威の底に潜む慈愛を看取し得て、云い難い子守唄の妙趣を味はせられる。

しかし子供に對する眞の脅威も少くない。脅威に拉し來られるものは、多くの國の守子唄に於て、一種の妖魔である。

歐洲諸國では、Bobby といふ怪物がよくかつぎ出される。日本の子守唄にも「山下坊主の目が光る」といふのがある。若くはある民族の憎惡を戰慄の標的となつてゐる歴史上の人物が、Topsy の代りを演ずる。佛蘭西の子供に對してウエリントン若くはビスマークが、英國の子供に對してナポレオンが、朝鮮の子供に對して加藤清正が提示せられるが如きは、その好箇の例證である。昔佛戰爭當事巴里の都によく歌はれた子守唄に、

As-tu vu Bismark

A la porte de Châtillon?

Il lance les obus

Sur le Panthéon.

といふのがあつたといふ事實には、何人も微笑せざるを得ないであらう。

それから或る個人でなくて、或る民族全體が、眠らない子供への脅威に利用せられることもある。ムーア人は、南歐を荒し廻つた民族であるが故に、南歐の子守唄には、よくムーア人が現れて、眠らぬ子に對して目をむく。またシニオル・アヴォリオ (Signor Avolio) の「ノトの民謡」(Canti popolari di Noce) には、

「狼が来るよ」
といふ言葉の外に、「靜かになさい、希臘人が来てゐますよ」
とか、「外へ出るな、希臘人がゐるから」
といふ言葉が、子供を脅すために、屢々彼等の母によつて使はれる。」

と書いてある。それはノトの地は、屢々希臘人の侵略に苦しめられたところであるからである。

アヴォリオが云つたやうに、動物を拉し來つて眠らぬ子をおごすのも、子守唄に共通な一個の手法でなくてはならぬ。羊が來て小指を咬むことを歌つた獨逸の子守唄は先に擧げた。狼が來るといふ嚇し文句は、歐洲の子守唄に廣く現れる。日本でもこの種の子守唄に決して乏しくない。「日本歌謠類聚」下卷に收めた伊勢の子守唄に、

ねんねんねんねこせ、

ねんねこ山の雉の子、

泣くとお鷹が捕つて往く。

ねんね。

とあるが如き、これである。(續く)

東西洋の子守唄 (上)